ある一人の俺とお前の物語

No Name

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある一人の俺とお前の物語

【Ｎコード】
Ｎ８１７６Ｒ

【作者名】
Ｎｏ　Ｎａｍｅ

【あらすじ】
友達が死んだ
そして俺は俺に出会った

first story

1／

昨日クラスメイトが死んだ。
そいつとは特に仲が良かったわけではない。
だからといって悲しくないわけでもない。
そのクラスメイトはおもしろくて、いい奴だった。
今日はそいつの通夜らしい。
そんな重たい朝を迎えながらエレベーターを降りた。
マンションから出たところで見慣れた奴を見かけた。
「よう八識（やしき）、おはよ。　お前の家、こっち方面じゃないだろ。
こんなところでなにやってんだ？」
そいつは何も答えず、ただニヤリと笑ってこちらへ歩いてくる。
「なんだよ、挨拶もなしか？」
なんてふざけて言っても何の反応もなく、こちらに歩いてくる。
そいつは俺の目の前で止まり手を上げた。
その手には何も持っていなかったはずだったのだが、剣が握られていた。
え？、と声を上げる間も無く、その手が振り下ろされた。

昨日クラスメイトが死んだ。
死んだクラスメイトの名前は工藤（くどう）　夕（ゆう）。
夕とは仲が良かったわけではないが、おもしろくていい奴だった。
今日は夕の通夜らしい。
そしてもうひとつ。
一昨日俺は俺に会った。
夢だろうと思って俺の言っていたことはスルーした。
そして昨日、夕が殺された。

一昨日会った俺は俺にこう言った。
「工藤　夕を殺す」
夕は午後４時に町外れの廃工場で殺された。
一昨日会った俺は午後４時に町外れの廃工場にいた。
そこから導き出される結論はひとつだけだと思う。
一昨日会った俺、様はもう１人の俺が夕を殺したのだ。
昨日もう１人の俺は俺のところに来た。
「明日は梶（かじ）　亮太（りょうた）を殺す」
そういって消えていった。
さて、今は午前４時。
これからひとっ走り行きますか。

振り下ろされるよりも先に、八識が吹っ飛んだ。
「亮太、怪我はないか？」
頭の中が混乱する。
吹っ飛んだのが八識。
八識を吹っ飛ばして俺の目の前にいて、声をかけてくるのも八識。
八識が二人？
「お前、双子の兄弟なんかいたのか？」
「いないよ。　あれは俺だけど俺じゃない」
「なんだそれ？」
「とにかく逃げろ。　あいつはお前の命を狙ってる」
吹っ飛んだ八識が起き上がってきた。
「邪魔するとはいい度胸ですね」
「うるせぇ、お前は黙って寝てろ」
八識が起き上がった八識に殴りかかった。
それをさらっとかわして、ローリングソバットを繰り出す。
八識が少し飛んでいった。
「馬鹿か君は。　僕は君なんですよ、君の考えていることくらい

分かります」
立ち上がろうとしている八識に八識が腹部に蹴りを入れ、八識が大の字で飛んでいく。
大の字で飛んでいった八識はマンションにぶつかる。
「ぐ」
そこに八識が剣を四本投げた。
「ぐあぁぁ」
八識の両手両足に剣が刺さり貼り付け状態になっている。
「君はおとなしくしていてください」
「黙ってろ。　こんなものすぐに抜いて・・・・・・っ、なんだこれ体が動かねぇ」
「君の場合だと手足を引きちぎってでも僕の邪魔をするからね。少し動けなくさせてもらったよ」
「君はそこで見てるがいい。　彼が死にゆく様を」
そういって八識は俺のほうを見て俺のほうに歩いてくる。
「なぜだ」
貼り付けになっている八識が叫んだ。
「なぜお前は俺の友達ばかりを狙う？」
「そうか、まだ話してなかったね。　僕は君だ、八識という人間だ。　だから、君が考えていることは僕の考えでもある。　君は人間が大嫌いだろう？だから僕はこの世界の人間を全て殺すのさ。それを起こす前に八識という人間を知っている人間は邪魔だ。　だからまず、君の周りの人間を殺そうと思ったのさ」
「ふざけるなよ、たったそれだけの理由で人を殺していいと思ってんのか？」
「ああ、思ってるよ。　僕にはそれだけの力と権利がある。　人間はゴミだ。　所詮は自分の事しか考えていないクズの上に、過ちを繰り返す。　だから誰かが人類というのもに終止符を打たなくてはならない。　それを僕がやろうってわけさ」
「・・・確かに人間は過ちを繰り返す。　けれど人は変われるは

ずだ、俺はそう信じている」
「ふっ、ふはははは。　変われる？　そんなのは無理だ、長い年月をかけたところで人は変われやしない。　もういい、君とのおしゃべりは飽きた。　さっさと彼を殺して次に行くとしよう」
八識がの手に剣が握られる。
一体どこから出してるんだ、なんて考えているとその剣が飛んできた。
ばばばばばば・・・・・・・・・
マシンガンを連射する音。
剣はマシンガンによって軌道をずらされ、俺の顔の横を飛んでいった。
「あんた何やってんのよ」
怒鳴り声が上がった。
声の方向を見ると長い黒髪の女がマシンガンを持ってこちらへと向かってくる。
「おー梓、いいところにいるな。　この剣抜いてくれ」
「おー梓、じゃあないわよ。　一言くらい言ってから出て行きなさい。　ったく探したわよ。　・・・・・・・で、彼がもう一人の八識？ほんと似てるわね」
「葉月（はづき）　梓（あずさ）か。　余計な真似を」
チィッ、と舌打ちをして八識はぱちんと指を鳴らした。
その合図で八識に刺さっていた剣が消える。
「まあいい、いずれ君は殺すさ」
そういって、感情のない瞳で俺を見てくる。
「じゃあね、僕。　僕はこの街（はこ）のどこかにいるよ」
「ちょ、待ちやがれ」
八識は消えていった。
「・・・・・・ふん、帰るわよ。　八識、ほらさっさと立って」
「無理、絶対無理。　痛くて立てない、家まで連れて行ってくれ」
痛いとか言う次元は超えてると思うのは俺だけだろうか。

「引きずるのでよければいくらでも」
「家まで連れて行ってください」
「よろしい」
葉月　梓と呼ばれていた人物は八識を背負いながら俺のところに来た。
「名前なんていうの？」
「梶　亮太だけど・・・」
「そう、じゃあ亮太君。　今朝のことは忘れてね」
そういって、頭に手を乗せてきた。
意識が沈んでいく。
「あ、れ？」
ばたりと眠りにおちた。

「おい、亮太あそこに置いておいていいのかよ」
「大丈夫よ。　すぐに目は覚めるわ」
「亮太もそうだが記憶のほうも不安だ」
「ちゃんと消したから大丈夫よ」
「そうか。　で、俺はいつまで背負われていればいいんだ？」
「家に着くまで」
「紗夜子（さよこ）さんいないのか？」
「家にならいるけど」
「・・・はぁ、すごく恥ずかしい」
「誰もいないんだからいいじゃない」
「それでもだ」
「あんまり文句ばっかり言ってると落とすわよ」
「落とせば？」
梓が手を離す。
「げふ」
地面に落ちた。

「落とすなよ。　こっちは怪我人なんだから少しはいたわれ」
「なに怒ってんのよ。　ほら、もう一度背負ってくださいって言わないと背負わないわよ」
「はぁ？　ふざけんな」
「じゃあ置いてく」
すたすたと歩き出す梓。
「もう一度背負ってください」
「あとは？」
「あと？　知るかよ」
「あっそ」
梓は歩き出すのを再開した。
「もう文句は言いません」
「よろしい」
梓は俺を背負い始めた。
女に弄ばれる俺、そんな事を考えていると少し涙が出そうになった。

second story

2／

玄関に入ると紗夜子さんがいた。

「紗夜子さん、ただいま」

葉月（はづき）　紗夜子（さよこ）、葉月　梓の母親であり、今現在の俺の保護者である。

「あらま、ひどい怪我ねぇ。　今直してあげるからそこ座って」

「だとよ、降ろしてくれ」

梓は俺を降ろして居間へと向かっていく。

「あずさぁ～」

「なによ」

「色々ありがと」

「あ、当たり前じゃない。　一緒に暮らしてるんだから当然よ」

ずんずんと居間のほうへと消えていった。

「それにしても、久しぶりねぇ」

「なにがですか紗夜子さん？」

紗夜子さんが傷口に手を当ててくる。

「昔は梓にずいぶんおんぶしてもらってたじゃない？　最近じゃあそんなことなかったからねぇ」

紗夜子さんが手を当てている傷口がみるみるうちに治っていく。

「そうですね。　俺、昔は梓よりちっちゃかったからなぁ、怪我したら梓に背負ってもらってよく紗夜子さんのところに行きましたね。　まぁ今でも梓と同じくらいの身長なんですけどね」

「そのうち大きくなるから大丈夫よ」

右手と左手の傷はもうほとんど治っている。

「そうだといいんですけどね」

苦笑しながらもう一人の自分のことを思い出していた。

この世界には人間と異人（いじん）というものがいる。

人間は俺たちみたいな普通の人間のことをいい、異人は人間ではない力を持った人のことを言う。
異人は普通の人間とはまったく変わりはなく、違うところはただ特別の力を持っているということだけだ。
彼ら異人は異能者ともいい、紗夜子さんのように人間を嫌ってない人たちもいるのだが、その大半は人間を嫌っている。
人類は昔、異能者たちを虐殺、迫害、さらには奴隷としてまで扱っていたことが原因だろう。
まぁ、それ以前からも異能者たちとの殺し合いはあったようだ。
異能者は一人一つ特化した能力を持っていて、紗夜子さんの場合だと治癒能力を持っている。
梓は人類と異人の間に生まれた子供だが、能力は発現していて記憶を操作する能力を持っているらしい。
しかし、もう1人の俺はおかしい。
剣を出すこと、そして瞬時に消えること、あいつは能力を二つ持っているのか？
能力は一人一つの上に、異能者でなければ能力は使えない。
そもそも、八識という人間が二人のいること自体がおかしい。
考えても考えても答えは出てこない。
「八識ちゃん、治療終わったわよ。　ほら、急いで朝ごはん食べないと学校に遅刻するわよ」
「紗夜子さんありがとう。　それじゃあ飯をいただきますか」
これ以上考えても答えは出てこないので朝食を食べることにした。
飯を食べようと思って居間に行くと見慣れない光景が目に入ってきた。
「・・・なにやってんでしょうか梓さん？」
「なにって、ご飯食べてるんだけど見てわからない？」
「そういうことじゃねぇよ。　何でお前が制服なんか着てるんだって聞きたいんだよ」

「なんでって、それは私が月読(つくどく)学園の生徒だからじゃない」
「・・・・・・お前、ほとんど学校来ないだろ」
「でも今日は登校するのよ」
「だからなんでだよ」
「・・・そんなに私が学校に行って欲しくないわけ？」
「いや、そういうわけじゃないけどさ」
梓は学年が上がってから一度も登校していない。
けれど頭がいいため学校からはテスト以外来なくてもいいですよ、なんて言われている。
俺と亮太は同じクラスなのだが梓は学校に来ないため、亮太が梓を知らないのは当たり前だったりする。
ちなみに梓と俺は同じクラスだ。
「はやくご飯食べないと遅刻するわよ」
「わかってる」
朝食を食べて家を後にした。

「そういえばもう一人の八識、はこの中にいるって言ってたわよね。　はこってどこだかわかるの？」
「それはあれだよ、あいつはこの街のことをはこって言ったのさ。街は高い塀で囲っているだろう、だから街のことをはこって言ったんだと思う」
まぁ、高い塀で囲っているのはこの街だけじゃなく、この国の全ての街なんだけどね。
「ふーん、じゃあもう一人の八識がどこにいるか分かるの？」
「分かるよ、今は廃工場のところにいるな」
分かるのは当然だ。
もう一人の八識は結局のところ八識なわけで、自分の居場所は自分で分かるのは当然だ。
故にあいつは俺の居場所がわかるし、俺もあいつの居場所がわかる。

「さて、もう少しで遅刻になる。　少し走るぞ」
「本当だ。　時間やばいわね」
小走りをしながら学園へと向かう。

「ふぅ、遅刻するかと思った」
チャイムぎりぎりで教室に着いた。
「早く座ってくださ～い。　ホームルーム始めますよ～」
小林先生が教室に入ってきて、ホームルームが始まり、一時間目、二時間目、三時間目と授業が続いていった。

三時間目の授業の途中でもう一人の俺がとてつもない速度で移動し始めた。
移動している方向の先にあるものそれは・・・・・・
「ッ！！」
家の方向に移動している、ということは目的は紗夜子さんか？
椅子から立ち上がる。
「どうした？」
「先生、体調が悪いので帰ります」
「・・・どう見ても体調が悪いようには見えんのだが・・・・・・」
「失礼します」
「お、おい」
教室から飛び出した。
ここから家まで１５分。
あいつの速度から考えてあっちは5分程度でついてしまう。
「くそッ、無事でいてくれよ紗夜子さん」
全力で家へ走り出す。

もう少しで家に着く。
まだあいつは家にいるようだ。

ということはまだ紗夜子さんは無事なのだろう。
「えっ？」
ドアノブに手をかけようとしたそのとき、あいつが家の中から消えた。
あいつがいるのは家ではなく学校へと変わった。
「くそっ、はめられた！？」
今学校ではちょうど昼休みというところだろう。
急いで学校に戻ることにした。

「まったく、なんであいつは帰ったのよ」
ここは屋上で、今は昼休み。
幼馴染は授業中に帰るし、他の人たちからは珍しいものでも見たようにじろじろ見られるし、たまに学園に来てこれじゃあ先が思いやられるわね。
ばたんと屋上のドアが開いた。
はぁはぁと肩を上下にして息をする幼馴染。
「やっと見つけた。　戻ってきたら教室にいなかったから探したよ」
「私がどこにいようと私の勝手じゃない。　大体あんた今までどこに行ってたのよ？」
「いや、ちょっとね。　もう一人の俺が動き始めたから少し気になったんだ」
「ふ～ん、それで？　もう一人の八識はいたの？」
「いなかった。　もう一人の俺はどうも今この学園にいるらしい」
「えっ？」
私は耳を疑った。
「だから、もう一人の俺はこの学園の中にいる。　狙いはまた亮太かもしれない。　お前はどう思う？」
「・・・・・・そうね、でも梶くんだけが狙いって言うわけじゃ

ないだろうし。　もしかしたら違う人を狙っているのかも」
「そうだな。　・・・う～ん、学園にいるのは分かるんだがどうも詳しい位置までは分からない」
「居場所が分かるんじゃなかったの？」
「そのはずなんだけどなぁ」
頭をぼりぼりと掻く幼馴染。
「じゃあ手分けしてもう一人の八識を探し出しましょう。　私は一階から探すわ」
屋上の扉へと足を向ける。
駆け寄ってくる幼馴染。
「そうか、それじゃあ頼むな」

ダンダンダンダンダン・・・・・・・
階段を急いで駆け上がる。
目的地はもうすぐだ。
そこに必ずもう一人の八識がいる。
ドアを開けてその場所へ入った。
屋上では幼馴染がもう一人の俺にハイキックを喰らわせていた。
地面に倒れるもう一人の俺。
今来た俺には何どうなっているのかわからない。
「どーなってんだ？」
思わずそんな言葉が口から漏れた。
幼馴染が俺に向かって指を指す。
「なんだよ」
「授業中に」
近づいてくる幼馴染。
「教室を」
もう手を伸ばせば届くところにいる幼馴染という名の梓。
「抜け出してるんじゃないわよ」

思いっっっきり殴られた。
梓、普通に痛いぞ。
「何で殴るんだよ」
「悪い子には鉄拳制裁ってやつ」
「それじゃあ、あいつもか？」
倒れているもう一人の俺を指さす。
「そうね。　私を騙そうとした罰ね」
「くっ、なぜ分かった？　僕がそいつじゃないと」
「あんたしゃべりすぎよ。　この八識（バカ）は大事なことほど私なにもしゃべらないわ」
「八識と書いてバカと読みやがったなてめぇ」
「じゃあなぜあなたは僕の存在を知っているんだ？」
「それはこの八識（バカ）がぽろっとしゃべったところを私が聞きだしたからに決まってるじゃない。　そのときのことは当の本人はあなたのことは夢だって言っていたわね」
「俺のことはスルーか？　そしてまた八識と書いてバカと呼びやがったな」
「まったく、くだらないミスをしたな」
「そのとおりね。　もっと勉強してからかかって来なさい」
「そうさせてもらうよ」
もう一人の俺はまた瞬時に消えた。
「終始俺を無視しやがって」
「ああ、そうそう。　八識」
「なんだよ」
「あなたが教室を出て行ったあと、教師が怒ってたわ。　「学園にきたら私のところまでくるように」だって。　伝えたわよ」
「行かないよ、どうせ怒られるだけだろう。　それが分かってて行くバカがどこにいるんだ？」
「ここにいるじゃない」
「俺を指差すんじゃねぇ。　てゆうかなんで携帯なんてものを取

り出してるんですか梓さん」
嫌な予感しかしないのでとりあえず屋上から出ようと後ずさりしていたところ、どすん、と背中に何かがぶつかった。
「悪ぃな」
後ろを振り向くとそこには俺が授業を抜け出したときにいた教師が携帯を持って立っていた。
「悪いですな。　俺ちょっと腹が痛いんで帰ります」
教師の横を通り抜けようとすると肩に手を回された。
「八識、そんなにオレの授業が嫌いか？」
「いや、別にそういうわけじゃなくてですね。　あれには深い深いわけがあって・・・・・・」
「そうか、言い訳なら職員室で聞いてやるちょっと来い」
「ちょ、ちょっと待てって。　梓、助けてくれ」
梓はこっちを見ながらニヤニヤと笑っている。
さすがは教師を呼んだ張本人、助けてくれる気なんてさらさらない。
「ほら八識、職員室まで来いって」
そのままずるずると職員室まで連れて行かれた。
そのあと学園が終わるまで説教タイムだったのは言うまでもない。

third story

3／

「はぁ～疲れた」

本当に疲れた。

もう一人の俺に騙されるわ、梓に殴られるわ、教師に説教食らうわで散々な一日だった。

歩いていると学園の玄関に梓がいた。

「なにやってんだ梓」

「遅い」

「なに言ってんだ？　話しがかみ合ってないぞ」

「だから遅いって言ってんのよ」

だめだ、話がかみ合わない。

しかも遅くなったのはお前のせいじゃないですか梓さん。

はぁ、とため息をつく

「わかった、わかった。　遅くなったのは謝る。　だからさっさと帰ろうぜ」

何で謝ってんだろ、なんて思いながら話す。

「謝るんなら許してあげてもいいわ。　じゃあ帰るわよ」

「へいへい」

世の中って理不尽なことといっぱいあるよね。

俺は梓と学園を出て、家へと向かった。

家に帰るとテレビからニュースが流れていた。

「昨日Ｃブロックのエリア１３が異能者によって跡形もなく潰されました。　今回の異能者たちは前回エリアを潰して回った善（ぜん）と呼ばれる組織とは別の組織だったようです。・・・・・・」

善。

異能者たちで作られた組織。

善の目標は俺たち人間を潰して回ること。
今回の組織は多分、善に賛成、あるいは賛同できるやつらが行ったことだろう。
Cブロックのエリア13か・・・。
ここのエリアもCブロックだが、ここまで被害が来ることないだろう。
俺はテレビを消して自分の部屋へ戻った。

部屋で本（漫画）を読んでいるとコンコン、とドアをノックされた。
「どーぞ」
入ってきたのは梓だった。
「なんだ梓？　用でもあるのか？」
「あるから来たんじゃない」
がー、と来た早々怒る梓。
怒るとふけるぞ、なんて言おうと思ったが面倒なことになりかねないのでやめた。
「怒らせてるのは誰よ」
「・・・人の心の中を読むんじゃねぇよ」
「読んでないわよ」
「じゃあなんでわかった？」
「嫌というほどあんたといるんだからそれくらいわかるわよ」
俺は少し感心した。
・・・少しだけな。
「で、用って何だよ？」
「今度の日曜って暇？」
「誰が？」
「あんたに決まってんでしょうが」
「ああ、俺？　俺は暇だが・・・。　それがどうした？」
「じゃあ、一緒に服買いに行くの付き合ってよ」

梓から誘ってくるなんて珍しいな。
そこで俺はひらめいた。
「なんだ好きな人でも出来たのか？」
梓の顔が赤くなる。
「その様子だとそうみたいだな。　いいのか俺で？　お前の好きなやつが誰だか知らんが、いくら男だからってたいした参考にならないかもしれないぞ」
まぁ学園にほとんど行かない梓が俺以外の男の知り合いがいる、なんてことはないだろうけどね。
「あんたでいいのよ。　というよりもあんた以外の男の知り合いがいない」
「やっぱりか。　で、今日学園行ったときに、いい奴でもいたのか？」
「何であんたに言わなきゃならないのよ」
「そうかい」
「・・・で、一緒に行ってくれるの？」
「外で昼おごってくれるんなら別にいいけど」
「わかった。　日曜、１０時には家出るけどそれでいい？」
「なんでもいい、まかせる」
「そう、じゃあ日曜よろしくね」
「あいよ」
梓はそれだけ言うと出て行った。
もう少しで夕飯だな。

夕飯を食べ終え、部屋へと戻ってきた。
「ふぅ、食った食った」
部屋にかけてある上着を手に取り、部屋を出た。
階段を下りて廊下に出ると梓に会った。
「どこ行くの？」
「買い物ってとこかな」

「ふーん、じゃあ私も行っていい？」
「遠慮しておく」
「なにそれ、全ッッッ然返答になってないんだけど」
「欲しいものがあるなら買ってきてやるから家にいろって」
「じゃあ食後のデザートが欲しいな」
「あいよ」
頼んだわよ、と言って、梓はひらひらと手を振って階段を上がっていった。
俺は靴を履いて玄関を出た。

かつん、かつん、かつん、かつん・・・・・・
一人、夜道を歩く。
あいつが動いていないか確認しながら歩く。
右へ左へ道を曲がる。
家を出て数時間、ようやく町外れの廃工場に着いた。
重い扉を開けて中に入る。
かつん、かつん、かつん・・・・・・
響く足音。
廃工場の奥にいるのは俺。
「よう」
もう一人の俺は俺を見ている。
「話があってきたんだが・・・」
「君の言いたいことはわかってるから言わなくてもいい。　どうせ俺の知り合いを殺すな、だろ」
「・・・そうだ」
「別に殺さなくてもいい。　だが後悔するのは君だ」
「後、悔？」
「ああ、後悔だ。　けれど後悔したときにはもう遅いんだよ」
「遅い？　なにが？」
「それはいずれわかるさ」

もう一人の俺は俺にゆっくりと近づいてくる。
「僕が前、人間は過ち繰り返すって言ったのを覚えているかい？」
「ああ」
「そして君は人間は変われると言っていたな」
「それがどうかしたのかよ」
もう一人の俺は俺の目の前で止まった。
「人間は変われないよ」
「なぜだ。　それはまだわからないだろ」
「そうかな。　僕にはわかるよ。　変われないからこそ今のこの国の状態があるんだろう」
「どういうことだ？」
「この国は何でブロックやエリアで分かれると思う？　それは人間と異人を分けているからだよ」
「は？　そんなことはないだろ、現に紗夜子さんたちはここで暮らしているじゃないか」
「そうだね。　けれどそれはほんの一握りだ。　ほとんどのブロックに異人は少ししかいない。　これはどういうことかわかるよな？」
「・・・つまり昔の習慣が今も残っていると？」
「そういうことだ。　だからそれを知った善が動いているんじゃないのかな。　まあそれは憶測にしか過ぎないけどね」
「だからといって人間は変われないわけでないだろう？」
「変われないさ、絶対に」
「だったら。　・・・だったら俺が変えてやるよ」
「・・・もちろん、君は言葉の意味は理解できているんだよな？」
「ああ」
変えるということ。
それはこの体制を作ったものそのものを変えるということ。
この体制を作ったのは昔の政府。
今もこの体制が続いているということは今の政府も容認している

ということだ。
そもそも、政府は政府ブロックの中にあり、政府ブロックはこの国のどこかにあると言われているだけでどこにあるかはわからない。
そして政府には国一つはゆうに潰せる軍事力を持っている。
「そうか、意味が理解できているのであれば別にいい。　ならさっさと、この工場に外にいる女と帰ったらどうですか？」
女？
俺は工場の扉を見る。
そこには梓が扉の影から顔を出していた。
はぁ、ため息をついて梓の元に駆け寄る。
「なにやってんだ」
「い、いや、ちょっと散歩をね・・・」
「・・・今までの話聞いていたのか？」
「少し遠くて聞こえなかったかな・・・」
疑いの目で梓を見る。
「ほ、本当だって」
「そうか」
工場の中に目をやるがそこにはもう一人の俺の姿はなかった。
「・・・帰るか、デザートでも買ってさ」
「そ、そうね」
コンビニによってデザートを買って家に帰った。

fourth story

4／

突然だが今は授業中だ。
なんの授業かって言うと今は歴史。
人間と異人の戦争について、というところをやっている。
それにしても空は青い。
こんな天気のいい日に教室と言う名の箱に入っているのはもったいない。
そこにつんつんとペンで腕をつつかれる。
「なんだよ」
つっついてきたのは梓だ。
「あんた、当てられたわよ」
「え？」
教師のほうに耳を傾けると確かに俺を呼んでいる。
「なんですか」
「なんですか、じゃない。　お前は私の授業を受ける気はないのか？」
「いえ、バリバリありますよ」
「そうか、じゃあ人間と異人の戦争をとめた三人の名前を言ってみろ」
「・・・織髪（おりがみ）に十夜（とうや）に宇翼（うよく）だろ」
「そうだ、もういいぞ」
何で俺に当てたんだよとか思いながら、また外を見る。
そうしているうちに授業が終わり、昼休みになった。
屋上で紗夜子さんが作ってくれた弁当を食べている。
梓に話しかけられた。
「あんた少しは授業ちゃんと受けようとは思わないの？」
「思うよ」

嘘だ、という目でじーと見てくる。
「そんなに見つめるなって。　照れるだろ」
「み、見つめてなんかないわよ」
「あ、そ」
梓をいじりながら弁当を食べて、昼休みが終わり、その後授業を受けて学校が終わった。
「う～、学校終わった。　帰るか梓」
「そうね」
玄関へ行き靴を履き、学校を出る。
家に向かって歩いていると梓が途中で曲がった。
「おい、ちょっと待て。　なんでそんなところで曲がるんだ？」
「朝お母さん言ってたじゃない。　夕飯の食材買ってきてって」
「あー、そんなこと言ってた様な言ってなかった様な・・・」
「言ってたわよ」
「そうか、だからスーパーへ行くために曲がったってわけか」
「そうよ」
荷物持ちは俺なんだなぁ、とか思いながら梓の後についていく。
スーパーに行くと俺がかごを持って梓が食材を入れていく。
いや、カートあるんだから使おうぜ。
梓は卵に長ネギ、豆腐に牛肉、シラタキにしいたけなどをかごに入れていく。
おっ、これは・・・
「今日はすき焼きか？」
「お母さんはそう言ってたわよ」
「そうか」
そのままレジに行き梓が会計を済ませる。
食品をビニール袋に入れ、ビニール袋を渡される。
「はい、持って」
「やっぱりか」
「当然よ」

ビニール袋を持ち、家に向かった歩き出す。
家に帰ったら紗夜子さんが鍋の準備をしていた。

すき焼きを食べ終え、部屋に戻る。
部屋にかけてある上着を取って部屋を出た。
部屋を出たところに梓が立っていた。
「おうっ！！」
びっくりして声を上げる。
「なんだ、飯食い終わったのか？」
こくん、と首を振る梓。
「・・・行くの？」
「あん？」
「また、廃工場行くの？」
「いや、違うよ」
「本当？」
「ああ、すぐそこまで買い物だ。　なんなら梓も行くか？」
「・・・行くわ、玄関で待ってて」
そう言って梓は自分の部屋へと入っていった。
玄関で待っていると梓が階段を下りてきた。
「じゃあ行くか」
そう言って俺は玄関を出る。
その後を梓がついて来た。
かつん、かつん、かつん、かつん・・・・・・・・・・
かつん、かつん、かつん、かつん・・・・・・・・・・
夜道に響く二つの足音。
それ以外の音は聞こえない。
そんな中、梓が話しかけてくる。
「あ、あのさ・・・」
「なに？」
話しかけてきたはいいが、梓は俯いてなかなか話し出さない。

はぁ、と息を吐いて話しかける。
「なんだ？　なんかあったのか？」
「・・・怒ってないの？」
「は？　誰が？」
「八識が」
「なんで？」
「だって昨日、後つけて行ったから・・・」
また梓は俯く。
「はっははは・・・・・・」
「何で笑うのよ」
「そんなことで俺が怒るとでも思ってんのか？」
「いや、だって、昨日帰ってからもあの時のことぜんぜん聞いてこなかったから・・・」
「別に聞く必要がないと思ったから聞かなかっただけだ。　聞いて欲しいのなら聞いてやるか？　どうして後つけてきたんだ？」
「・・・八識が隠し事してたみたいだから気になったの」
「え。　何で俺が隠し事してると思ったんだ？」
「だって、あんた大事なことほど何も言わないじゃない」
「よくわかったな」
「長い間一緒に暮らしてるんだから当然よ」
・・・なんというか、俺は梓には敵わないなぁ、と感じた。
「なによ」
「なんでもない」
「あっそ、ところで買い物ってなに買いに行くの？」
「チーズケーキ」
「はい？　なんでよ」
「それはチーズケーキが食べたくなったからだ」
「それくらい作ればいいじゃない」
「面倒だ。　そんなこと言うなら梓が作ってくれ」
「な、なんで私が作んなきゃいけないのよ」

「いや、梓が作ってくれるって言ったからだろ」
「そんなこと言ってないし。　それにさっきの言葉をどう変換したらそんな言葉が出てくるのよ」
「ああそっか、梓は作れないからそうやって逃げるんだ」
「逃げてないし。　それにチーズケーキくらい作れるわよ」
「そうか、ならレアチーズで頼むぞ」
「望むところよ」
梓にチーズケーキの約束をさせて、コンビニに向かった。
それじゃあチーズケーキのかわりにチーズプリンでも買って帰るかな。

fifth story

5／

「ふわぁ～」

眠い。

朝起きるのがつらい。

眠たいです。

なので今日は学園は休みます。

おやすみなさ～い。

ばたん。

ドアが開かれる音。

「起きろ八識。　遅刻するわよ」

この声は梓か。

残念ながら梓さん、今日は学園休むって決めたのですよ。

なので俺は寝ます。

「八識、起きて」

体を揺すられる。

や、やめろって、そんなことしたら眠気が飛んでいくだろ。

だんだん意識が覚醒していく。

「あーわかった、わかったよ。　起きるって。　起きるからあと30分寝かしてくれ」

「わかったわ。　じゃあそこで寝てなさい。　そこに熱湯かけてあげるから」

「やれるもんならやってみそ」

ばたんとドアの閉まる音がした。

――――五分後――――

俺は梓に背負われて家に帰ったときのことを思い出していた。

あの時はもう一人の俺に手足を刺されて動けなかったな～、なんてことを思い出す。
うん？
少し、よからぬことを思い出しかけたような気がした。
俺は梓に背負われて、落としてみろって言ったら落とされたんだっけ？
・・・・・・落とされた！！
ばたん。
ドアが開く音がする。
俺は速攻で目を開けて起きた。
俺の目の前にはやかんを持った梓さんがいる。
「ちょ、お前なにやってんだよ」
「なにって、八識に熱湯をかけようと・・・」
「やけどするだろ！！」
「さーね」
梓はやかんを傾けようとする。
「や、やめろって。　お、起きるから、起きるからやめてください」
「あらそう。　残念ね」
朝からなんていうことをやらかそうとするんだこの女は。

梓の後に続いて階段を下りて、居間へと向かう。
居間のテーブルには朝食が並べられていた。
席について飯を食う。
ん？
いつもと味が違うような・・・
まあでもうまいことには変わらないのでそのまま食べ続ける。
朝食を食べ終え、部屋へと戻り学園に行く準備をする。

玄関に行くと梓が待っていた。

「準備、早いな」
「八識が遅いだけよ」
梓はドアを開けて玄関を出る。
俺も梓に続いて玄関を出た。

「今日のさ・・・」
歩いていると梓が話しかけてきた。
「なんだ？」
「今日の朝食どう、だった？」
「どうってなにが？」
「いや、いつものお母さんの味と違う味じゃなかった？」
「ああ、そうかもな。　けど朝食はうまかったから別に気にしてなかったな」
「本当に？」
「ああ」
「そっか、そっかそっか」
突然上機嫌になる梓。
何でそんなにテンション高くなるんだよ。
「おい、梓」
「なによ」
「一つ聞きたいことがあるんだがいいか？」
「いいわよ。　なんでもこの梓さんに聞きなさい」
「思い出したことなんだがな、お前がもう一人の俺と会ったとき、マシンガン持ってたよな？」
「マシンガン？　あ～、確かに持ってたわね」
「何でそんなもの持ってたんだ？」
「拾ったのよ」
「は？」
「だから拾ったの。　八識のこと探している途中で落ちてたのよ」
「そんなことはないだろ。　道歩いててマシンガン拾いましたな

んて、そんなバカなことがあるか」
「本当よ。　あっそ、八識は信じてくれないんだ」
「わかった、わかった信じるって。　百歩譲ってマシンガンを拾ったとしよう。　で、それは今どこにある？」
「部屋にあると思うけど」
「やっぱりか」
はぁ、と息を吐いて話しを続ける。
「それ、帰ったら俺に渡してくれ。　女がそんなもの持ってると危ないからな」
「大丈夫よ。　どっかの八識に持たせるくらいだったら私が持っていたほうが何倍も安全よ」
「まあいい。　帰ったらお前の部屋に行くからそのとき渡してくれ」
「ちょ、ちょっと、私の話ちゃんと聞いてたの？」
「ああ、ちゃんと聞いてたよ。　それじゃあ学園から帰ったら部屋に行くからよろしくな」
無理やり話を切り、学園に向かって走った。
もちろん、梓を置いてだけどね。

学園に着いた。
梓を置いて走ってきたものだから、ずいぶんと時間がある。
こういうときは屋上にでも行って少し寝るかな。
屋上に向かい、壁に背中を預けて寝た。

キーンコーンカーンコーン・・・・・・
チャイムの音で目が覚めた。
立ってうーん、と体を伸ばす。
時間を見ると、一時間目の授業がちょうど終わった時間だった。
さぼったことになってしまったな、と思いながら教室に向かう。

ガラガラガラ・・・・・・
教室のドアを開けるとそこにはいつもと違う空気が流れていた。
「おー八識ー」
俺を呼ぶ声。
それは間違いなく梶　亮太だ。
「なんだよ」
「一時間目どこ行ってたんだよ」
「屋上で寝てた」
「ふーん。　まあそんなことより、大変なことになってるな」
「大変なこと？　何が？」
「お前の彼女、朝告られたらしいぞ」
「俺に彼女はいないんだが」
「は？　またまた、隠しちゃって。　大丈夫だって八識たちが付き合ってるのはクラスのみんなが知ってるぞ」
「いや、本当に付き合ってるやつなんていないんだが・・・」
「え？　お前、葉月ちゃんと付き合ってるんじゃないのか？」
「何で俺が梓と付き合ってることになってるんだよ」
「でも葉月ちゃんが登校するときはいっつも一緒じゃん」
「ああ、幼馴染だからな」
「ふ～ん、そうか？　俺たちの目にはそれ以上の関係に見えたんだがなぁ」
「ほっとけ。　それより梓が告られたって本当か？」
「おっ、気になる？　やっぱり気になっちゃう？」
「おちょくらなくていいから話を進めてくれ」
つまらねー、という目で俺を見てくる亮太。
「本当だよ。　ちなみに相手はB組のメガネかけたやつだったかな。　名前は忘れた」
「なんでそんなに曖昧なんだよ？」
「いや～、俺はお前と葉月ちゃんが付き合ってると思ってたから、どうせ告った男は撃沈するんだろうな、と思って名前までは聞いて

なかった」
「そうかい、当てにならん情報ありがとよ」
「あてにならんとか言うなって、こうやって情報提供してやってるんだからありがたく思えよ」
「はいはい」
机の上においてあるかばんを持って歩き出す。
「おい、どこ行くんだよ？」
「帰るんだよ」
「お前、学園来た意味あったのかよ」
はははと亮太が笑っている。
それを流して家に帰り、ベッドに入って寝た。

目が覚めた。
時計を見るとちょうど六時をさしていた。
階段を下りて居間に行くとテーブルには夕飯が並べてあった。
悪いんだけども、梓のこと呼んできてくれない？、と紗夜子さんに頼まれたので二階に上がって梓の部屋の前まで来た。
梓の部屋のドアノブに手をかけようとしたとき、あることが頭の中をよぎった。
「これは・・・」
これは漫画とかでよくある部屋の扉を開けたらお着替え中、とかいうパターンなんじゃないのか？
しかも時間的には学園から帰ってから少し経ったくらいだろう。
頭の中で天使がささやく。
「ここはちゃんとノックをしてから入ったほうがいい」
天使の隣では悪魔がささやいている。
「そのまま入っちゃえって」
また天使がささやく。
「駄目だ。　ちゃんとノックしてから」
悪魔も負けじとささやく。

「黙って入っちゃえよ」
「ノックして」
「黙って」
「ノックして」
「黙って」
「ノックして」
「黙って」
「ノックして」
「黙って」
あ〜。
天使と悪魔の言葉が頭の中をぐるぐると回っている。
「・・・・・・決めた」
俺は決断した。
ここで行かず、なにが男か。
がちゃりとドアノブをひねった。
・・・・・・。
まあ、わかってはいたんだけどね。
でもやっぱり年頃の男の子だから興味があったりしちゃって。
期待とかもしちゃうんだよ。
部屋の中で梓は制服のまま、ベッドに横になっていた。
「お〜い、あずさ〜。　飯が出来たぞ〜」
・・・。
へんじがない。　ただのしかばねのようだ。
さて、俺はちゃんと呼んだぞ。
梓は寝てるようだし、まあほっとくか。
梓の部屋を出ようとしたときに、声が聞こえた。
「あんたは女の子の部屋に入るときにノックの一つもないわけ？」
「そりゃ、あれだって。　ドアを開けたらお着替え中、みたいなことがあったら面白いだろ」
「あんたはね」

「まあ、そんなに怒るなって。　飯、出来てるぞ」
怖くて梓のいる後ろなんて振り向けない。
「じゃあ俺はお前を呼びに来ただけだから、先に行ってるぞ」
「そう、じゃあ先に逝かせてあげる」
かちゃ、なんてマシンガン構えるような音がしてるのは気のせいですか梓さん。
「・・・やめとけって、あったたら痛いだろ」
「私は痛くないけど？」
「・・・・・・俺が悪かった」
「それじゃあそれなりの誠意ってものを見せてもらいたいわね」
「どうすればいい？」
「日曜のお昼おごってくれるなら許してあげる」
「わかったよ、昼飯おごるよ。　だからそんな物騒なもの下げてくれ」
しょうがないわね、なんていいながらマシンガンを俺に渡して横を通っていく。
「これ・・・。」
「あんた、朝それを取りに来るって言ってたじゃない」
だから渡したのよ、と言って梓は居間へと向かっていった。
これ（マシンガン）を部屋において俺も居間へと向かい食事をとった。
その後は部屋に入り、眠りへとついた。

sixth story

6／

「それじゃあな。　元気にしてろよ」
男の人は小さな俺の頭をなでてくる。
「八識、ちゃんと紗夜子さんの言うこと聞くのよ」
女の人は小さな俺の体を抱きしめてくる。
そして男の人と女の人はこの街から出て行った。

目が覚めた。
ずいぶんと懐かしい夢を見ていた。
あの夢は親父たちが街から出て行くときのことだった。
「何で今更そんな夢を・・・。」
親父たちが出て行ったのは俺が五歳のとき。
それから俺は、この葉月家に居候として暮らしている。
「ふぁ～」
それにしてもまだ眠い。
布団をかぶり、眠りにつこうとする。
コンコン、とドアをノックする音。
いつも決まって俺を起こしに来るのは梓だ。
「朝よ、起きなさい」
「あいよ」
しょうがないので、起きるとするか。

朝食を食べて学園に向かう。
いつもどおりの朝。
他愛もない会話をしながら梓と学園に向かう。
学園の校門を通ろうとしたとき、一人の学生に話しかけられた。
俺ではなく梓が。

「梓さん」
話しかけてきた学生はメガネをかけた男。
「昨日のこと考えてくれましたか？」
昨日のこと？
まあ、俺には関係がないので校舎に向かおうとする。
その俺の腕を梓は掴んで、腕を組んだきた。
「あん？」
「ごめんね。　私たち付き合ってるから」
え？
えぇーーー。
「な、なにを・・・」
自分の顔が赤くなってるのがわかる。
いいから話し合わせなさい、なんて耳打ちしてくる梓もそのようだ。
「だから、君とは付き合うことはできないんだ」
「そう、ですか」
それじゃあ、なんていいながら梓は、俺を校舎へとぐいぐい引っ張っていく。

「おい」
教室にはいづらくて、屋上に来ている。
「なによ」
「むちゃくちゃだな、お前は」
「わ、悪かったわね。　とっさだったのよ」
「そりゃわかるけど、別にああしなくてもよかったんじゃないか？」
「だからごめんって」
そう謝られてしまうとからかうこともできない。
「それじゃあ、帰ったらチーズケーキ作ってくれ」
「チーズケーキ？」

「ああ、前約束してたやつ。　それで許してやるよ」
そう言って梓に教室に戻ることを伝えて屋上を出る。
教室に入るなり、亮太が絡んでくる。
「やっぱり、付き合ってたじゃん」
「ほっとけ」
「で、葉月ちゃんとどこまでいったの？」
「なんでそういう話になるんだ。　第一、付き合ってないって」
「またまた、そんなこと言ちゃって」
「付き合ってないのは本当だ。　信じるにしろ信じないにしろそれはお前の勝手だ」
それだけ言って俺は自分の席に着いた。
亮太がなにか言っていたがよく聞き取れなかった。

学園が終わり、今は自分の部屋にいる。
今日は午前中で学園が終わる日だったので授業も楽だった。
さて、問題はこれからだ。
時計はじきに十二時を指そうとしている。
もちろんまだ昼食は取っていない。
紗夜子さんは夕方くらいに帰ってくるので昼食を作ってもらうのは無理だろう。
とりあえず居間へと向かう。
居間に行くとキッチンに梓が立っているのが見えた。
「なにしてんの？」
梓に近づいて話しかける。
「なにって昼食作ってるの、見てわからない？」
「そりゃそうだな」
「そこら辺に座って待ってなさい。　もうちょっとでできるから」
「は？　なにが？」
「ちゅ・う・しょ・く・が」
「お前馬鹿だな、待ってたって昼飯が出てくるわけないだろ」

そうこうしている間に梓がキッチンからでてきた。
「はい」
そう言って一つの皿を手渡された。
「チャーハンじゃん」
「嫌いだった？」
「嫌いじゃないけど・・・、これどうすんの？」
「食べればいいじゃない」
「あ？」
うん？
少しの間、足りない頭を使ってみる。
「これ食ってもいいのか？」
「そう言ってるじゃない」
「これ食ったら見返りでも求めてくるのか？」
「そんなわけないでしょ」
梓はあきれた顔で俺を見てくる。
「そ、そうか。　さんきゅ」
そういってテーブルについて、チャーハンを食べ始める。

昼食を食べ終わった。
梓はまだ居間にいたので声をかける。
「うまかった、昼飯さんきゅ」
じゃあ俺、部屋に戻るから、と言って、部屋に戻ってベッドへと飛び込んだ。

ドアをノックする音がする。
その音で眠りから目を覚ました。
「どうぞ」
ベッドに横になったまま、眠たい声のままドアの向こうの人にそう告げた。
入ってきたのは梓だった。

「おう、どうした？」
「はい、これ」
梓は手に何か持っている。
眠たい体に鞭を打って、体を起こして、梓が持っているものを確認する。
梓が手に持っているもの。
それはチーズケーキだった。
「これ・・・」
「作ったのよ。　あんたと約束してたから・・・。　あとで感想聞かせてよね」
梓は部屋に備えてあるテーブルにチーズケーキを置き、出て行こうとする。
「梓」
「なによ」
「お前は食わないのか？」
テーブルの上に乗っているチーズケーキは1ホールある。
「えっ？」
「だからお前は食わないのか？　それとも自分の分は他によけてあるのか？」
「作ったのはそれだけだから、他にチーズケーキはないわよ」
「だったら、一緒に食べないか？　せっかく作ったのに作った奴が食べないなんてさ」
「そう、だね」
ナイフとフォークと皿は持ってきてくれていたが、フォークと皿は一人分しかなく、梓がフォークと皿を取りに行って戻ってきた。
「じゃ、食べようぜ」
そう言って俺はチーズケーキを切り分け、二人の皿に乗せる。
切って皿に乗せたチーズケーキを口に運んだ。
梓はまだ食べず、俺のほうを見ている。
「・・・どう？」

「・・・・・・お前、味見したか？」
「や、やっぱりおいしくなかった？　前はチーズケーキくらい作れる、とか言っちゃったけど本当は作るの初めてで・・・」
「・・・これ、めちゃくちゃうまいぞ」
「え？」
「いや、マジで。　梓も早く食ってみろって」
そういわれて、梓がチーズケーキを口に運ぶ。
「・・・本当だ、おいしい！！」
「だろ、さずが梓だな」
と、当然じゃない、なんていいながら梓は次々と口に運ぶ。
その後、俺と梓は紗夜子さんが帰って来るまで話をしながらチーズケーキを食べていた。
まあそのせいで梓は夕食を残していたけどね。
夕食が終わった後は、部屋に行ってベッドで横になると、そのまま深い眠りへと堕ちていった。

seventh story

7／

大きなあくびをする。

今日は休日。

「眠い」

なのに俺は朝早くから起きている。

このままもう一度寝ようかと思ったけれど、その後が怖いのでしょうがなく布団から出た。

今の時間は午前九時。

いつもの俺なら余裕で寝てる時間帯だ。

お前はどうだ？

休日なら昼まで寝てるのが普通だろ？

まあ余談はここまでにしておいて、十時までには支度を済ませねばな。

それじゃなかったら梓に殺される。

なんたって今日は休日。

日曜日なのだから。

部屋から出て階段を下りて、居間へと向かう。

居間には紗夜子さんがいた。

「おはようございます」

「あら、おはよう。　早いわね八識。　いつもだったら寝てる時間じゃない？」

「そうですけど、色々とあるんですよ」

「梓とデート？」

「で、デート！？　い、いや違いますって、あいつから買い物に付き合って言われただけですから。　それに梓は好きな奴がいるみたいですし・・・」

「そう」

紗夜子さんは微笑んで朝食できてるわよ、と俺に言った。
朝食を取っているが居間には梓の姿が見当たらない。
俺を誘っておいて自分は寝てるのか？
「紗夜子さん、梓知らないですか？」
「梓ならとっくに朝食食べて、部屋に戻ったわよ」
「そうですか」
寝ているわけではないのか。
朝食を食べ終え、部屋へと戻り、着替えをする。
着替えをしてから時計を見ると少し時間があったのでベッドで横になって目を閉じた。
コンコン、とドアをノックする音が聞こえる。
少し寝ていたようだ。
立ち上がりドアを開ける。
ドアの前にいたのは梓だった。
「家、出ようと思うんだけど・・・」
「わ、わかった」
二人して玄関へと向かい、家を出た。
「で、どこに行くんだ？」
「そうね、ゲートの近くにあるデパートがいいな」
梓が今言ったゲートっていうのは、この街から出入りするためのところ。
ゲートは一ヶ所しかなく、自由に出入りできるものじゃない。
といっても、手続きさえすれば街から出ることはできるんだけどな。
「わかった」
ここから歩いてゲートの近くに行くには半端じゃなく時間がかかるので、ＪＲを使うことにした。
ＪＲから降りて、少し歩いたところにデパートがあった。
あることはわかっていたが、昔に数回しか来たことがないので、

デパートの大きさに少し驚いた。
「でかいな」
「当たり前じゃない、このエリアの中で一番大きいデパートなんだから」
梓がデパートの中へと入っていく。
「おい、ちょっと待てって」
その後を追いかけて俺の中に入る。
少し店内を周った後に最上階にあるレストランのフロアに入った。
「なに食うの？」
「そうね、あれなんてどう？」
梓が指さしたのは普通の学生が持っているお金じゃ完全に足りないぐらいの金額が書いてあるレストランだった。
「え？　そんなの無理に決まってんだろうが」
「昼おごってくれるっていう約束だったじゃない」
「それは別にいいとして、いやアレは無理だから。　別のところにしてくれ」
「あっそう」
梓は奥へと進んでいく。
そうして色々な店を見てから、結局は大抵のものはなんでもそろえている店に入り、昼食を取った。

「ふう、飯も食ったし、帰るか」
「なに言ってるのよ、まだ何にも買ってないわよ」
梓は洋服店の中に入っていく。
どうせ荷物持ちなんだろうなぁ、と思いながら後をついていく。
「この服なんかどうかな？」
服を合わせて、俺に梓が問いかけてくる。
「服はいいんじゃないか？　けど、お前には似合わないと思うぞ」
「そんなことないわよ」
梓が鏡の前に立つ。

「本当だ。　そんなに似合ってない」
「だろ。　・・・ん、こんな服はどうだ？」
服を手にとって、梓に渡す。
梓がそれを鏡の前で合わせる。
「・・・いいかも。　じゃあ、これにしようかな」
「そうかい。　それじゃあそれ買ったら帰るか」
「これ終わったら別の店行くわよ」
「マジか」
「あたりまえじゃない」
梓は会計を済ませて、次の店に向かう。
「おい、ちょっと待てって」
大きな音がした。
梓の足元が崩れる。
考えるより先に体が動いた。
梓の手首を掴む。
「痛ッ」
腕が切れて、血が出ている。
「きゃ、な、なにこれ」
梓はじたばたと暴れる。
「動くな梓。　下を見るな上を見ろ」
梓はその一言で暴れなくなった。
どうやらビルの一部が大きな音とともに崩れたようだ。
周りの奴らは階段のほうへ逃げているようだ。
原因はわからない。
今はただ必死で梓を上げようとするが、うまく力が入らない。
「くそッ」
「や、八識、腕から血が出てる」
「そんなことはどうでもいい、今は上に上がることだけを考えろ」
とはいうものの、腕に力が入らないため今の状態を保つのが精一杯だった。

「どうだ？　上がれそうか？」
「無理みたい。　手や足をかけるところがなくて・・・」
チィッ、と無意識に舌打ちをする。
「誰か、誰かいないのか」
大声で助けを求める。
「八識」
聞いたことのある声が耳に入ってきた。
顔をまわしてその人物の顔を見る。
「りょ、亮太か」
「なにやってんだ。　早く逃げないとやばいぞ。　火の手だって上がってきてる」
「それよりも手を貸してくれ、梓が落ちそうなんだ」
「梓？　ああ、葉月ちゃんか。　葉月ちゃんを掴んでいるのか？」
「ああ、だから助けてくれ」
「葉月ちゃんってどうせ異能者と人間のハーフだろ」
一瞬耳を疑った。
「お前、なに言って・・・」
「そんな奴とっとと落としてお前もこっちに来いって、じゃないと逃げ遅れるぞ」
「そんなことできるわけないだろ」
そう叫ぶ。
「八識、誰かいるの？」
「ああ、亮太が・・・。　亮太、いいから手を貸してくれ」
「嫌だよ、異能者なんて助けたって意味ないだろ。　俺は逃げるぞ、八識、お前もさっさと来いよ」
亮太は階段のほうへ去っていく。
「亮太ぁ、亮太ぁあああああ」
叫ぶが亮太の姿は見えなくなっていく。
「八識、どうしたの？」
「な、なんでもない」

「・・・なにこれ、燃えてる臭いがしない？」
さっき亮太が火の手が上がってるって言ってたな。
「その辺に火がついてるんだろ」
「え？」
「そんなことどうでもいいんだ、梓もう一回見てくれ。　その辺に手や足がかけられる場所はないか？」
「・・・ないみたい。　八識は私のこと持ち上げられない？」
「無理だ。　うまく力が入らない。　このままの状態を保つのがやっとだ」
「・・・・・・そう。　じゃあ、八識、手を離して」
「え？」
耳に届いた言葉は俺を凍りつかせた。
「八識、手を離して。　じゃないと八識まで・・・」
「嫌に決まってんだろうが」
怒鳴ってしまった。
「くそ、上がれよ。　上がってくれよ」
梓を持ち上げようとするが、やはり力が入らない。
「八識、私ね・・・」
梓が俺に話しかけてくる。
「私ね、八識のことが好きだったんだ」
梓の言葉に俺は戸惑った。
「えっ、だってお前、好きな人がいるんじゃ・・・」
「前に言ったじゃない、私は八識以外の男の知り合いがいないって」
なんでそれを今ここで言うんだよ。
「八識には私の気持ち、最後に知ってて欲しかったから」
本当にお別れみたいじゃねぇか。
何度も梓を上げようとするが、結局、腕には力が入らない。
両手で掴んだら俺まで梓と落ちちまう。
もうこれ以上、ここにいると火に飲まれるだろう。

くそ、くそ、くそぉおおお。
俺の頬に涙が流れた。
自分じゃ大切な人を守ることが出来ない無力感。
誰でもいい、誰か、誰か俺に手を貸してくれ。
そう強く思ったとき、後ろから声が聞こえた。

eighth story

8／

「なにをやっているんだ君は」

そういってそいつは梓に手を伸ばした。

「1・2の3で引き上げるます」

俺の返答も待たずに進める。

「1・2の3ッ」

俺ともう一人の俺は梓を引き上げた。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・。　おま、え・・・」

「君に死なれては僕が困る」

もう一人の俺は続ける。

「だから言ったじゃないか、どうせ人は変われないと。　異能者に対する差別や偏見、そんなものはいつになっても変わらない。だから梶　亮太を殺そうとしたのに君は邪魔をしてくれましたね」

反論が出来ない。

正直、亮太がそんなことを考えているなんて思いもしなかった。

「このことを君がどう思おうが君の勝手です。　しかし、忘れないでください人は変われません」

「・・・・・・前にも・・・」

「なんです？」

「・・・前にも言ったかもしれないが、・・・だったら、俺が・・・」

「俺が変えるですか、だからなんですか？　君が変えたところで人間どもが今までやってきた行いが全て許されるわけがないだろう」

「それでも、それでも変えなければ先には進めない」

「変えたところで先には進めないかもしれませんがね」

俺たちの会話に梓が入ってきた。

「助けてくれたことはお礼を言います。　けれど、このままここ

にいては火に飲まれるんじゃないですか？」
確かに火の手はもうすぐそこまで来ている。
「火に飲まれる、ですか。　じゃあ、こうすればいいんじゃないですか」
ぱちん、ともう一人の俺が指を鳴らした。
その音を合図に火が止まった。
いや、これは火が止まったというよりも・・・
「ここにいる三人以外の時間を止めました。　それでは僕は帰らせていただきます。　あなたたちも逃げるといいでしょう」
そういって、もう一人の俺は止まった時間の中を歩き出した。
俺たちもその後に続いて歩き出す。

止まった時間の中を歩いてやっとデパートの外に出られた。
外に出た途端に、時間が動き出した。
そしてまた大きい音がした。
また崩れるデパート。
「ここにいたらまずいな」
梓の手を引いて、ＪＲのほうへと走り出した。
その途中、もう一人の俺を目で探したが、その姿は見つけられなかった。

ＪＲの駅は異常なまでに混んでいたが、なんとか乗って自分たちの駅で降りた。
家に着くまで少し時間がある。
心を落ち着かせる。
一気に色々なことがあり過ぎた。
ここに来るまでほとんど梓と会話をしていない。
「あ、あずさ」
「な、なによ」
「さっきのことなんだけどさ・・・」

「さっきのはなんでもないから気にしないで」
そんなこと言われても、気にするなって方が無理だ。
だって俺は・・・。
「俺は梓が好きだ」
「えっ」
「ダサいな、俺は。　こういうことはやっぱり男から言うもんだろ。　それなのにさ・・・。　けど俺、思ったんだ。　お前が落ちそうなとき、どうしても止めたかった。　お前には死んでほしくなかった。　そこで気がついたんだよ。　俺はやっぱり梓のことが好きなんだなぁって」
自分で言っていることが死ぬほど恥ずかしいことに気がついた。
けれど俺は続ける。
「だから、今までどおり俺の傍にいてくれ。　お前が笑って傍にいてくれるだけでとても幸せだから」
「・・・あんた、せこいわね」
梓は俺の体を抱きしめてくれた。
俺も梓の体を抱きしめた。
少しの間抱きしめあっていたが、周りの目が集まってきたのに気がついて梓から離れた。
ぼりぼりと頭をかく。
「・・・帰るか」
「そうね」
梓の手を取って、家に向かって歩き出した。

家に入ると紗夜子さんが玄関に立っていた。
「二人とも大丈夫だった？」
「私は大丈夫。　でも、八識が腕に傷を負ってるから見てあげて」
それだけ言って梓は二階へと上がって行った。
腕を出して、と紗夜子さんに言われたので怪我をしている右腕を差し出した。

右腕に手を当てて傷を治癒してくれる。
「そういえば紗夜子さん、なんでデパートで事故が事故にあったことを知ってるんですか？」
「朝、梓がデパートに行くって言ってたからね。　それにデパートのことはもうニュースにもなってるわ」
「そうですか」
「それに、デパートのことは事故じゃないみたいよ」
「え？」
「なんか異能者たちの集団が攻めてきたみたい。　けれどその集団はいなくなったみたいね」
数日前に見たテレビのニュースが俺の頭によぎる。
「そうですか。　でもそいつらいなくなったんですよね」
もう一度確認をとる。
「そうじゃないかって、ニュースで言ってたわ。　げれど、ゲート付近のものは破壊されたみたいね」
「そうですか」
去っていったということは、このエリアが潰されることはないだろう。
「もういいわよ」
腕を見ると怪我はすっかり治っていた。
「ありがとう、紗夜子さん」
そういって二階に上がり、自分の部屋へと入った。
ベッドに転がり込む。
今日一日は色々なことがありすぎた。
そんなことを考えていると、意識が沈み始めた。

ninth story

9／

目が覚めた。

今は朝だということは、そのまま眠ってしまったらしい。

起きて、下の階へと下りる。

居間では梓がテーブルで食事を取っていた。

テーブルには俺の分であろう食事が並んでいる。

「お、おはよう」

「おはよう」

帰って来てから梓と何も話さず、そのまま寝たため、少し戸惑ったが、梓の向かいに座り朝食を食べる。

無言の食卓。

意識してしまってなにを話していいかわからない。

「きょ、今日は、梓は学園に来るのか？」

「行くわ」

「そ、そうか」

どぎまぎしながら食事を進める。

梓が先に食べ終わり、席を立った。

その後俺も食べ終わり、自分の部屋へと戻り、学園に行く準備をした。

いつものように準備が終わり、玄関に行くと梓が待っていた。

「なにやってんの、早く行くわよ」

「ああ」

靴を履いて外へと出る。

学園に着いて、教室に入るとちょうどチャイムが鳴り、担任が入ってきた。

自分の席に着く。

ホームルームが始まった。
「みんなに残念なお知らせだ。　もう知っている人もいると思うが、昨日のデパートの事故で梶　亮太が亡くなった」
「えっ？」
思わず声を上げた。
あいつは俺たちを置いて先に逃げたんじゃないのか？
「心からご冥福を祈る」
担任が他の連絡を伝え、教室から出て行った。
そうか、あいつのことを一発、ぶん殴ってやろうと思ったが、それはもう出来ないのか。
今まで俺とつるんでいた奴だったし、死んだの？　だから？、みたいにそう簡単に割り切れるわけではない。
なんとなく、やる気がなくなって一時間目が始まる前に学園を抜け出した。

学園を抜け出した直後、手を掴まれた。
後ろを振り向くと、梓が立っていた。
「授業くらいちゃんと受けなさい」
「なんとなく、やる気なくしたんだよ」
「あんた単位大丈夫なの？」
「やばいかもしれない、けど、今日はちょっとね」
梓に手を掴まれたまま、家に向かって歩き出す
家に帰ると紗夜子さんの姿はなかった。
ソファーに座り、テレビをつける。
「今、ゲート跡地では大変なことになったいます」
何気なくつけたテレビに目を奪われた。
「昨日襲撃してきた集団が今日もまた襲撃してきています」
俺の体が動いた。
自分の部屋へと戻り、バッグを持ち、その中にマシンガンを入れる。

急いで玄関へと向かう。
途中で梓にあった。
「八識、どこ行くの？」
「急いでるんだ、あとでな」
「ちょっと」
梓のことを振り切って、外に出る。
ＪＲに乗り、ゲート跡地へと急ぐ。
別に亮太の敵討ちってわけじゃない。
俺に出来ることがあるなら、それをしようと思っただけだ。
親父たちのように・・・。
ＪＲを降りて、走ってゲート跡地へと向かう。
そこでは警備隊と異能者の集団が攻防戦をしていた。
警備隊は圧倒的に不利。
ここからどうやって挽回するのか、という状況だ。
平和的解決をしたいがこれではとても無理そうだ。
「くそッ」
マシンガンを取り出し、バッグを捨てる。
崩壊した建物の影で様子を見る。
その間に次々と人が殺されていく。
ここでは場所が悪いな、場所を変えるか。
移動しながら敵の人数を探る。
・・・二十人くらいか？
次々と警備隊が投入されるが一向に戦局は変わらない。
「探したよ」
後ろから声が聞こえた。
後ろを振り向く。
後ろにいたのは梓に告白して、振られた奴だった。
「お前は・・・」
「僕の名前は矢島（やじま）　隼人（はやと）。　八識君、君を探したよ」
そういって隼人は俺の懐に入り、腹部に一発入れて、マシンガン

を奪った。
「八識君、ついて来てもらおうか」
銃口を向けられ、仕方がなく、奴の案内どおりに進んだ。
進んだ先は人気のないところ。
そこには異能者の集団がいた。
「お前・・・」
「そう僕は、君たちの言うところの異能者なのさ。　奥を見なよ」
奥を見ると他の異能者に掴まれて立っている梓の姿があった。
「梓」
「や、しき？」
「おっと、動くなよ」
隼人は俺に銃口を向けながら梓のほうへ進む。
「彼女、君を追っかけてきたみたいだね」
「てめぇ」
「こいつさぁ人間とハーフのくせに生意気なんだよなぁ」
隼人は梓の頭を持って、地面に投げ捨てる。
梓が地面に倒れたところを足で踏むつける。
「生意気なんだよ。　顔は良くても所詮は出来損ないなんだよ」
何度も何度も梓を踏みつける。
「お前ぇ」
拳を握る。
「動くなよ、動くと彼女撃つよ」
そういわれてしまっては動くことが出来ない。
感情が高まる。
「やめろ」
叫ぶ。
「叫んじゃって、そんなにやめてほしいんならやめてあげるよ」
足を梓の上に乗せたまま、踏みつけるのをやめた。
「殺す」
そういって隼人の方を睨む。

「おー怖い怖い」
隼人の手から火が出ている。
炎を使う異能者だったのか。
「君は僕が殺してやるよ。　大丈夫、彼女もあとから送ってあげるから」
隼人の火が俺に向かって放たれた。

last story

１０／

俺に向かって放たれた炎。
くそッ、なんの打開策もない。
「君は何をやっているんだ」
一人の男が俺の前に立った。
炎が一瞬で消えた。
「君に死なれては困ると何度言ったらいいんだ？」
「お前、なんでここに・・・」
もう一人の俺が俺の目の前にいる。
「君はここから離れていろ」
「だからなんでここに・・・」
「いいから離れていろ」
もう一人の俺は怒鳴った。
俺が少し離れるともう一人の俺は消えた・・・隼人の後ろに。
「彼女から離れろ」
「！？」
もう一人の俺は隼人を蹴り飛ばし、地面に転ばせた。
「そんなに死にたいなら死ぬといいよ」
もう一人の俺がぱちんと指を鳴らす。
その合図で隼人の周りに火がついた。
「熱い、熱い、熱いよぉ」
火達磨になりながら隼人が暴れている。
しかし、それもいずれおとなしくなった。
もう一人の俺が梓を抱きかかえる。
「てめぇ」
周りにいた異能者が一斉にもう一人の俺に殴りかかる。
もう一人の俺は俺の目の前に立っていた。

消えた!?、瞬間移動か?、などと異能者たちが声を上げている。
「彼女を」
梓を俺に渡してくる。
「梓、大丈夫か?」
返事はないものの梓は俺に軽く微笑んだ。
異能者たちがこちらに向かってくる。
「止まれ」
もう一人の俺が放ったこと言葉は低く、重いものだった。
場の動きが止まる。
もう一人の俺が能力を使ったわけじゃない。
先ほどの言葉はそれほどのものだった。
「僕はあなたたちを殺しに来たのではありません。　彼らを少し助けに来ただけです。　もし、あなたたちが僕や彼らに危害を加えるようなら殺します」
「おー、そうだそうだ。　お前たち手を出すんじゃないぞ」
男が俺たちの後ろに立っていた。
「しかし、こいつらは・・・」
「黙れ」
その一言で異能者は口を開かなくなった。
「悪かったな、部下が君たちに暴力を振るってしまって」
俺たちの後ろにいる男は俺に手を差し伸べてくる。
その手には掴まず、問う。
「あんたは、一体・・・」
「俺か?　俺の名前は朱鷺(ときしゅう)　周。　この異能者の集団をまとめているモンだ」
「それじゃあ、あんたがこのエリアを襲った張本人だって言うのか?」
「そうだ。　けどな兄ちゃん、この状況は俺にも予想外なことだ」
そういって朱鷺　周はもう一人の俺を指差す。
「あんたのその能力、もしかするとあんたはあの男の息子かい?」

「さぁ？　どうだろうね」
もう一人の俺はあの男じゃわからないよ、と朱鷺　周に告げる。
「あの男って、まさか・・・」
もう一人の俺に殴りかかろうとしていた奴らの中の一人が声を上げた。
「そうだ、俺たちの集団はなぜここまで減った？　野郎どもそれを考えてみろ」
朱鷺　周がそう言葉にすると異能者たちが反応し、騒がしくなった。
朱鷺　周が肩に付いているトランシーバーで命令を出す。
「・・・・・・ああ、そうだ。　だから、絶対に撃つなよ」
朱鷺　周がもう一人の俺に話をしだす。
「悪かった悪かった、君がいるんじゃ、このエリアには手出しは出来ないな」
今の異能者たちの会話からして思い当たる節があった。
それを言葉にしようとしたが、もう一人の俺が俺の口をふさぎ、話し出す。
「そういってくれるならありがたいな。　じゃあ、さっさとここから消えてくれ」
「いいだろう、野郎ども、撤退だ」
「しかし・・・」
一人の異能者が反論しようとしたが、朱鷺　周に一言によってその口を閉じた。
異能者が次々とエリアの外に出て行く。
しかし、俺には納得がいかない。
エリアをこれほどめちゃくちゃにしておいて、撤退するだと？
ふざけるな。
俺は朱鷺　周に殴りかかろうとしたがもう一人の俺に止められた。
「君には彼女がいるだろう？」
その一言によって、少し平常心を取り戻した。

異能者たちが完全に見えなくなる。
異能者たちの集団がこのエリアを離れた、ということだろう。
「なんでだ？」
俺はもう一人の俺に問う。
「なにが？」
「何であいつらを殺さなかった？　お前になら出来るだろ」
はっ、ともう一人の俺は息を吐く。
「僕は正義の味方ではない。　帰ってくれただけマシだと思え」
「ふざけんな、さっきの争いで人が、たくさんの人が殺されたんだぞ。　それで帰ってくれただけマシだ？　そんなの・・・」
「どうしてこうなったかを考えろ。　人間たちが今まで異能者たちにどれだけの大罪を犯した？　それを今になって払うツケが来ただけのことだろうがッ」
もう一人の俺が胸倉を掴んだ。
だが、その手はすぐに離れた。
もう一人の俺の体が吹っ飛ぶ。
「くッ」
もう一人の俺がわずかな悲鳴を上げるのと同時に、時間が止まった。
今ここでは俺ともう一人の俺しか動いていない。
「な、にが・・・」
一瞬のことに事態を把握しきれていない。
もう一人の俺が立ち上がった。
腹部からは血が出ている。
腹を押さえながらこちらに歩いてくる。
俺の目の前に立ち、もう一人の俺が話し出した。
「ある男の話をしよう。　男と女二人の人物がいる。　その二人は互いに好意を持っていた。　男と女はあるビルの中を歩いていた。
すると、突然ビルが崩れ始めた。　そのせいで女が足場をなくし

落ちかけるが、男が女の腕を掴み落下は阻止した。　しかし、男は腕に傷を負い一人では女を上げられなくなってしまった」

「その話って・・・」

もう一人の俺は目で口を挟むな、と言っている。

「続けるぞ。　そこに二人の男がやってきた。　女を掴んでいる男はその二人に助けを求めた。　男たちはこう言った。　その女、人間じゃないんだろ。　そう言って男たちは女の救出を断った。そして、女は男を巻き込まないようにと男の手を払って下へと落ちていった。　男は嘆いた。　どうして人間か人間じゃないかで女は死ななければならなかったのか。　人間か人間じゃないかはそれほど重要なことなのか。　男は決意した。　そんな考えを持つ人間を殺そう、と。　そして男は人を殺した。　殺して殺して殺し続けた。

そして男はある男に出会った。　出会った男は男に向かってこう言った。　そんなことをして彼女が喜ぶとでも思っているのか。そこでようやく男は気づいた。　いくら人間を殺し続けようと、女は戻ってこないし、女は喜ばないんじゃないかと。　そして男は過去へと戻った。　そして、女を見捨てた男を一人殺し、もう一人の男を殺そうとした。　しかし、それはその時代の自分自身によって阻まれた。　そしてその男は崩れたビルの中その時代の自分自身と女を助けた。　これがある男の話だ」

・・・・・そうか、もう一人の俺は人間を殺すためにこの時代に来たんじゃなく、女、つまり梓を助けにこの時代に来た、ということか。

「人間は過ちを繰り返す。　人間は人間のことしか考えていない。だから俺は人間が大嫌いだ」

俺？

もう一人の俺が初めて自分のことを俺と表した。

「一つだけ言い忘れていたことがある。　君の親父はもう死んでいる」

親父が？

「そんなはずないだろ。　だって、俺にはまだ力がない」
そう力がない。
俺の一族には代々受け継がれてきた力がある。
それは途中で途切れさせてはいけない、親父は昔、そんなことを言っていた気がする。
「君に力がないのはこの時代に俺がいるからだ。　俺は未来のお前だから」
未来の俺・・・、ということは力を持っている、ということか・・・・・。
・・・そうか、力は同じ時代に二つあってはならない。
そのため親父が死ぬ寸前に俺に能力を継承したとしても、もう一人の俺がいるから俺には力は宿らないってわけか。
「君の親父はあの異能者の集団に殺されたんだろう」
「え？」
「奴らの言葉を思い出せ、あいつらは俺と同じ能力を持った男とあったと言っていただろう」
「あいつらが親父を・・・」
一瞬にして殺意が湧いた。
しかしその殺意はもう一人の俺の言葉によって霧散した。
「君は彼女についていろ」
もう一人の俺が歩き出した。
「どこに行く？」
「異能者の集団はまた来る」
それを止めるのか、その体で。
「十夜（とうや）　八識（やしき）。　君は君の考えで行動しろ。　このままだといずれ反乱は起きる。　お前がそれを止めろ」
そういうともう一人の俺は消えた。
重たい体を引きずりながら、やつらの前まで行き、時間を元に戻

す。
「お前、お前は殺したはずじゃ・・・」
朱鷺　周が驚いている。
「あんな一発じゃ俺は死なねぇよ。　お前ら覚悟は出来てるんだろうな？」
「はっ、怪我人がよくいうぜ。　野郎ども撃てぇえええ」
時を止める。
ポケットからナイフを取り出し、異能者の首を次々を斬っていく。
全員の首を斬ったところで時間を元に戻す。
異能者たちの首から血が噴出している。
これで間違いなく全員殺しただろう。
俺はその地面に倒れた。
血を流しすぎたようだ。
未来は変わった、よな？
だんだん意識が遠くなる。
そして俺は絶命した。

俺は梓を抱きかかえながら家へと戻った。
途中でもう一人の俺がどこにいるかわからないことに気がついた。
ということはこの時代から消えたか、あるいは死んだか。
あの出血からしてたぶん、もう・・・・・・。
俺は梓を抱えたまま家へと戻った。
家では梓をベッドに寝かせ、俺は家を後にした。

あてもなく歩き続ける。
俺の頭の中ではぐるぐるとある言葉が繰り返される。
いずれ反乱は起きる、か。
もう一人の俺が別れ際に放った言葉。
わからない。

なぜだ、なぜ反乱は起きるんだ？
十夜、織髪、宇翼。
この三つの一族が存在する限り、反乱は失敗に終わるはずだ。
現に、昔起きた人間と異人の戦争、それを止めたのは言うまでもなく十夜、織髪、宇翼の一族。
この三つの一族は異能者たちとは違う特別な能力を持っている。
そして、十夜の末裔である俺には十夜の一族が代々受け継がせてきた時を操る能力が使える。
時を止めるのはもちろん、過去に行ったり、未来に行ったり、時に関係するものならばすべてが使える。
もし、もう一人の俺が言っていたように親父が死んでいて、親父が俺に能力を継承していればの話だけどね。
一度、能力を試してみるか・・・・・・。
時よ止まれ。
心の中でそう思う。
ピタリ、と周りが止まった。
動くもの全てが、この世の全ての時間が止まった。
「はは・・・・・・」
これでわかってしまった、親父は死んでこの世界にはもう、いないのだと・・・。
時間を元に戻す。
なにもなかったように歩き出す人々。
実際、俺以外の人にとっては時を止めたなんて誰にもわからない。
ふらふらと歩く、歩く。
気がつくと廃工場に来ていた。
工場の中に入り、腰を下ろす。
もう一人の俺が使っていた場所、か。
何か反乱に関して手がかりになるものはないか探したが結局は何も見つからなかった。
そしてもう一つ、俺は考えなければいけないことがある。

この工場でもう一人の俺が言っていたこと。
人間と異人は分けられている。
あの時は俺が変えると言ったが、もし、政府が絡んでくるようであれば本当に厄介だ。
政府が持つ国一つは簡単に消せる軍事力。
俺一人では難しいかもしれないな。
今はとにかく情報が足りなすぎる。
それにもし反乱が起きるのであれば、それこそ俺一人では難しい。
やっぱり、ここから出て行くしかないのだろう。
俺は立ち上がり、工場を後にした。

家についた俺は部屋にいた。
部屋で何をやっているかというと・・・・・・。
コンコン、とドアをノックされる。
八識帰ってきてるの?、と梓の声が聞こえる。
「え、あ、ちょ、ちょっと、ドア開けるの待って」
俺はモノをベッドの下に押し込む。
がちゃり、とドアの開く音。
「なにやってんのよ八識」
「べ、別に何にもしてない」
「怪しいわね」
「何にもしてないから。　それより俺に用があったんじゃないのか?」
「用はあったんだけど、それより話を変えようとしないで。　実際のところなにやってなのよ」
「だから、何もしてないって。　おい、そこいじるなよ」
がさごそと俺の部屋を漁る梓。
「なんにもないわね」
「もう気は済んだか?」
じー、と俺の見てくる。

「な、なんだよ」
「本当に何もやってない？」
「ああ、そう言ってんだろうが」
「そう、ならいいわ」
「で、お前は何しに来たんだよ、というより何で動いている？お前寝てなかったか？」
「それはお母さんが治してくれたから、もう動けるようになったの」
なるほどね、じゃあもう紗夜子さんは帰ってきてるってわけか。
「夕飯できたって」
「あ？」
「だから、夕食の準備ができたって」
「わかった、すぐ行くから梓先に行っててていいぞ」
「待ってる」
「は？」
「八識が来るの待ってる」
・・・・・・しょうがないな、アレは後でやるか。
「じゃあ、さっさと飯食いに行こうぜ」
俺は梓を強引に部屋から連れ出して、居間へと向かった。

飯も食べ終わり、自室へと戻ってきた。
さっさとアレを終わらせるか。
ベッドの下からモノを取り出して、中に物を詰める。
―――三十分後―――
「ふぅ」
やっと終わったか。
今までいじっていたモノをベッドの下に入れる。
後は明日それを持って出て行くだけだな。
ベッドに体を預けてそのまま眠りにおちる。

目が、覚めた。
今は午前四時三十分。
眠たい目をこすりながら体を起こす。
昨日ベッドの下に入れたリュックを取り出す。
それを持って音を立てないように部屋を出る。
階段をゆっくりと下りて、幼少の頃より住んでいた家を後にした。
始発のＪＲに乗った。
ＪＲを降りてゲートに向かって歩く。
思ったとおりゲートはまだ補修されていなく、エリア外へ簡単に出れるようだ。
さて、今まで住んだいたこの町ともお別れか。
少し名残惜しみながらこの町を後にする。
「待って」
俺の後ろでよく聞きなれた声がした。
俺は振り向いてその女を見る。
「なんだよ梓」
そこにはよく知った幼馴染の姿があった。
「どこに行くの？　その先はエリア外だよ」
「知ってるよ、だから行くんだ」
「八識はこの町から出て行くって言うの？」
「ああ」
「なんで？　なんで？　わけわかんないよ」
梓は涙声で俺の元へ駆け寄ってくる。
「お前は別にわかんなくていい」
「なんで？　何で何も教えてくれないの？」
梓には関わってほしくないから黙って出て行こうと思ったんだけどな。
「戻れよ、紗夜子さんが心配するだろ」
「戻るわけないじゃない、八識が行くんなら私もついていくわ」

「やめてくれ」
そういって、指を鳴らすために片腕を上げる。
梓に腕を掴まれた。
「時間、止めようとしたでしょッ」
梓が怒鳴った。
この行動はもう一人の俺と同じ行動だったからな。
一回見ているだけあって梓でも気づいたか。
「今、時間を止めたら八識のこと一生恨んでやる」
「何だよそれは」
なんちゅう脅しだ。
そんなこと言われたら止められるわけないだろ。
けど、止めないわけにはいかない。
「梓、俺帰ってくるからそれまで待っててよ。　ちゃんと帰ってくるからさ」
「そういう問題じゃない。　何でなにも話さないで一人で背負い込んじゃうの？　私じゃダメなの？」
「そうじゃない。　梓には迷惑かけたくなかった、ただそれだけだ。　黙って行こうと思ったけどお前に見つかっちゃったな・・・・・・」
梓の体を抱きしめる。
「俺、行くから。　・・・・・・梓、大好きだ」
俺は時を止めた。
ゲートの跡地を抜けて俺はこのエリアを出て行った。

・・・あいつは最低だ。
なんで私をおいていくのよ。
数時間前去っていった八識（ばか）のことを思い出しながら必要なものを詰め込む。
詰め込んだリュックを持って玄関へと足を運ぶ。
「お母さん、私、行くから」

「八識ちゃんのことちゃんとつれて帰ってきなさいよ」
「わかってる。　それじゃあ、行くね」
ドアを開けて外に出た。
これからあの八識(ばか)の後を追うために・・・・・・
ＥＮＤ

ｌａｓｔ　ｓｔｏｒｙ（後書き）

この読みづらい文章を読んでいただきありがとうございます
十夜八識の物語はいったんここで幕を下ろします
これから八識はどうなっていくの？というのはそれはまた別のお話
この作品は三部作の一つに過ぎません
一つはゲームとして作成していますが、もう一つは公開するかはまだ未定です
次に投稿するのであればこの世界観とは別のものを投稿しようかなと思っています
ここまで読んでいただき本当にありがとうございました
あと感想などいただけるとうれしいです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8176r/

ある一人の俺とお前の物語

2011年4月6日08時27分発行